

〔所感〕

平和をもとめて

インドネシア共和国立パジャジャラン大学

客員教授 原 喜 美

1 まえがき

まだ見ぬ、うるわしの国、インドネシアの首都ジャカルタに到着したのは、1981年9月28日のことであった。日本から、ICUから4000マイル以上も離れたこの首都の所在する南海の宝庫ジャワ島は、赤道直下の紺碧の海に横たわり、アジアとオセアニアそして中東とむすぶ重要な接点となっている。インドネシアに来て、つくづく感ずることは「地球はまるい。」という分り切ったことである。それは世界の中心は至るところに存在するということである。ヨーロッパ中心、アメリカ中心、日本中心などと、とかく「先進国志向」の考え方が、私達の意識を根強く支配しているが、地理的歴史的パースペクティブから見ても、どこの国も世界の中心であり、その重要性に軽重はない。

いま私は20数年間喜びも悲しみも共にわけ合ったICUの思い出の一端を綴ろうとしているが、この遙かなる国の一隅 Bandung から、三鷹市にあるICUを望見すると、4半世紀間に生起した、すべてのことがらは、海流によりあとかたもなく押し流されてしまったようで、何一つ残っていない空虚さを感じるのである。

4半世紀というと、生れた子供が成長し、25歳となって、一人前の成人として、社会に巣立つ為に要する歳月である。かなり長いようで、経過してしまおうと全く一瞬間である。

2 ICUとの出会い

「出会い」というのは超人間的力のはたらきにより起るものであり、私

にとってICUとの運命的な出会いもまさにそうであって、それによって私と私の家族の人生は180度の転換をなしたのであった。

それは1951年7月中旬のことであった。焦土と化した日本が、再び過去のあやまちを繰り返さず、平和国家として世界の仲間入りをしたいと国民一人残らずが切望していた時であった。私は当時日本から第1回のGAR I O A留学生として、アメリカに派遣され、シカゴ大学大学院人間発達学科(Human Development) 修士課程に在学中であった。ある日突然私はDurgin先生(日本YMCAの育ての親といわれる方で、ICU創設のため、ご夫妻で尽された。)からお手紙をいただいた。そのお手紙には「ニューヨークに行ったら、必ずICU財団の事務所にいき、Maurice Troyer博士という方をお訪ね下さい」と書いてあった。それからまもなく、私はニューヨークに行く機会があったので、早速Durgin先生のご指示に従ってTroyer博士に面会に伺った。その頃Troyer博士は席のあたたまる暇もなく、ICU創設のため東奔西走されておられた。今から30歳以上もお若かった、Troyer先生は、初対面にもかかわらず、情熱をこめて、ICUの高遠な構想について、語られた。私は先生の熱意に感銘を受け、もしそういう大学の建設に参加させていただくことができれば、どんなに素晴らしいことであろうかと考えた。しかし私は既に自分の母校(津田塾大学)に就職が定っていたので、お話を承ってご辞退した。このままICUと私が交叉しなければ、私は今もっと違った道を歩いて居り、恐らくインドネシアにも来ていなかったことであろうと思う。

私は1951年10月留学を終え帰国し、津田塾大学教授陣に専任講師として加わった。そして1954年夏、東京大学で開催されたアメリカ研究セミナーにおいてClyde Kluckhohn博士指導の文化人類学セミナーに参加する機会を与えられた。このセミナーにおいてGordon Bowles先生の知遇を得て、再びICUとの関係が復活した。それは1955年5月のことであった。私は当時ICUで文化人類学を教えておられたBowles博士の研究(青少年に関するもの)をお助けする非常勤研究員として週一回ICUの桜並

木の道を通うこととなった。それから間もなく、1957年4月から、学務副
学長 Troyer 先生の補佐を兼ねて津田塾大学から I C U に転任した。(1
957年から59年まで、都留春夫先生がご留学中であつたので、私はその後
任として、Troyer 副学長の補佐を行なつた。)

この2年間はまさにさかまく怒濤の中を泳いだような思いで、I C U 在
任中最もきつく、それだけに思い出の多い時代であつた。特に「寮費値上
げ」をきっかけに起つた、一連の学生会の動きなどは特記すべきであろう。
当時の学生会会長は、いま朝日新聞で活躍しておられる荒垣敬氏であつた。
当時 S F C = Student Faculty Council というのがあつて隔週に教授会代
表と学生会代表は会合をもつていた。斉藤勇一先生、Elizabeth Babbott
先生(生物学)と私が常連で、屢々深夜に及ぶまで協議した。そして毎月
一度は Troyer 先生のお宅で、夫人の心のこもつた夕食をご馳走になりな
がら、学生会の責任者達と四方山話に花を咲かせた。こうして学生達との
コミュニケーションも比較的よいと考えられていたにもかかわらず、理事
会決定による「寮費値上げ」の問題に直面して、学生会の一部では、全学
ストを行なうことを計画していた。ある日 Babbott 女史と私は学生代表
と相対して5時間にわたり話し合つた。この時何を話したかは余りよく記
憶していないが、平行線を交わらせる為に努力した。当時寮は第一男子寮、
第二男子寮と、第一女子寮、第二女子寮と四つあり、大学院生の為のシブ
レーハウスは建設中であつた。私は Troyer 先生について各寮を廻つて、
寮生と懇談して諒解を求めた。結論として、暖房費500円を保留すること
で、寮費を2000円から3000円に値上げすることが、ようやく諒承された。

Troyer 先生の間人に対する愛と信頼感、I C U キャンパスにおける全
生活を有機的に機能させて、I C U の理想を実現させようという気迫には、
常に胸を打つものがあつた。私も現在外国に来て、インドネシアの大学で、
先生方や学生達と生活を共にしているが、立場の違いはあるものの、とうて
い Troyer 先生の100分の1も出来ない無能さを感じるのである。Troyer
先生からは、常に泉のように内側から湧き出る生命の水、キリストに対す

る信仰のほとばしりを感じるのである。私が、Troyer 先生をお助けしたのは、ほんの2～3年であったが、先生は10年間のICUにおける激務の為一時は心臓を悪くされる程であったが、現在はフィラデルフィアでご夫妻共お元気でご活躍中である。

3 挫折と再起の歩み

Troyer 先生から実践を通して学んだ人間の尊厳に対する考え方、教師と学生との関係、人間と人間との関係、すなわち人間観、教育観は、それまでの私の基本的人生観が更に確かめられ、私の一生を大きく支配した。それは人間に対する限りない信頼にもとづくものである。たとえ時には裏切られようとも、嘲笑されようとも、常に私の思考と実践の原点となっている。私の歩んで来たささやかな人生、それは私にとってはまさに波瀾万丈に富んだもので、常に挫折と再起のくり返しであったといっても過言ではない。その運命的な出会いにより、私の人生の半分以上を過ぎさせていただいたICUを去るに当り、しめくくりとして私の心のうちを語らせていただくことにする。

先ず31年前に、私が幼い長女と夫を残して、何故敢えて単身留学をしたかということから始めなければならない。それは「東京国際裁判」に象徴されたように、私の眼前で、日本の国の社会機構、価値の大転換が起り、ささやかな存在である私も「恒久の平和を達成させるために、何かしなければならない」という焦燥感にかられたからであった。東京裁判判決の日、余りの衝撃で、食事が咽喉を通らなかった。そこで丁度当時公募していた第1回アメリカ留学生試験の受験を思い立ち、1950年7月13日、朝鮮事変のさ中に、アメリカの軍用機で日本を立った。「瞳のようにわたしを守り、みつばさの陰にわたしを隠し」という詩篇第17篇の聖句を、浅野順一牧師よりいただき、まさにイエスに促がされて、太平洋の波の上を歩く思いであった。

それから一年有余、当時200万冊も蔵書のあるシカゴ大学の図書館で、

分陰を惜んで読書にいそしみ、Robert Hayighurst 博士に師事して青少年のパーソナリティ形成の社会学的側面の研究に集中した。この時私は修論として、戦前から戦後にかけての日本における女性の地位の推移を探りつつ、「社会化」の問題を取り上げた。(Contemporary Japan. Vol. xx, nos. 10—12, 1951にその一部掲載)

願れば私の人生は「二兎追うものは一兎も得ず。」という諺のように、家庭と職業という二足の草鞋を履いて歩み、その足どりはいかにもたどたどしい。常に教育と研究の板ばさみになりながら、更に子育てや家族の問題と自分の専門との相克と戦いながら、家族に負担をかけ過ぎているのではないかと悩みながら生きて来た。そして現在再びインドネシアに「妻の単身赴任」という特殊なケースで来ているわけである。これはインドネシアの婦人にとっては、それほど珍しいことではないが、海外派遣の日本人社員の家族の方々にとっては、「夫の単身赴任」ということは、仕方のないことであるが、「妻の単身赴任」などということは到底考えられないことで、私などは全く異質な存在であろう。

私は迷いに迷って、しかし私の家族、親族はじめ多くの方々の祈りと励ましに支えられ、国際交流基金の援助により「インドネシアのパリ」といわれる Bandung に送られて来た。何故私が Bandung に来たのか。私は一体ここに来て何をしようとしているのか。ということについては、今の私には未だはっきり分らない。しかし唯一つのことだけは確かである。それは30数年前に私が心に深く抱いた「平和をもとめる心」が未だ私の中で消え失せていないことである。否むしろ人類の平和的存続が、核戦争の脅威により危ぶまれている時に、「今こそ一刻も早く、平和の叫びを高らかに響き渡らせなければならぬ。」という痛苦な思いに満たされていることである。

この Bandung に到着して以来、恰も私のこの平和への希求に呼応するかのようになり、毎朝4時になると、私が住んでいる大学のキャンパス付近のコミュニティは、「朝の祈りへの誘い」で轟くのである。イスラーム教

徒が90%近いインドネシアでは、多くの人々は、毎朝4時になると齋戒沐浴して、神に祈りを捧げるのである。毎日5回の祈禱の時を厳重に守っている人々も相当いるようである。この「朝の祈りへの誘い」は約20分間鳴り響く。近くのモスクから拡声機を用いて人々を祈りへと導くのである。私はこの安らかな響きを自分の信仰への反省の時として、絶対的平和への道を切り開いていく為に何をなすべきかを祈り求める時としている。最初このざわめきを突然きいた時は、何事が起ったのかと二階の寢室の窓をあけて、方々の家々を眺めてみた。するとあちらこちらの窓から明りがみえ、生活のざわめきを感じられた。「朝型」の私には、この早朝の「祈りへの呼びかけ」は極めて心地よく、自然に一日の生活が始まり、朝の数時間は読書に、執筆に費すことが出来るのである。

数年前1975年—76年まで、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学に派遣されて、眼からうろこが落ちたように、アジアを見る新しい視点が与えられた経験から、今回再びインドネシアに送られ、限られた期間に、先づインドネシアについて出来るだけ学び度いというのが私の最大の希望である。「インドネシアの心」を理解することによって、何かそこからインドネシアと日本の交流の上で役立つ糸口が掴めるかも知れないというのが私の願いである。「国際交流は人に始まり人に終る」といつか松本重治氏が言われたことをきいたが、ささやかな試みであるが、月々の生活において、大学における学びの場を通して、インドネシアの人々と心の交流をもちたいと願っている。

既に私として、この一か月余りの間に幾つかの感動的経験をもったので、それをここに記させていただく。先ず当地に赴任して当面したのは住居の問題であるが、同僚の先生方や文学部長 **Badudu** 先生があちらこちら根気よく案内して下さった結果移ったのが現在の住居である。家主の夫人は「是非日本人に」といわれ、条件が不利であるにもかかわらず、私に貸して下さった。借りる側の立場になり、細やかな^{こころくば}心配りをしていただき、反対の立場にあつたら私には到底出来ないようなやさしさを感じた。このあ

たたかい心が、インドネシアの心であると沁々と感じた。また私の為に雑用を引受けてくれる二人の婦人は、私の留守の間には、床磨きやガラスふきなど、快適に生活出来るように配慮している。

「どうして日本人である私、未だインドネシア語もたどたどしい私が、このような親切を受けることが出来るのであろうか」と自問自答せざるを得ない。或る日、日本人の集りで一寸この話をしたところ、「インドネシアの家主さんで、そういう人もあるのですか」という答が返って来た。現在では来イ間もないので、私としては受ける一方で、こちらとしては何もしていない。

もう一つの経験は、Bandung から東方へ40軒位離れたところに Sumedang という地方(県)がある。農村地帯で人口数万人位ときいている。その農村の田圃の真中に建っている高等学校を訪問した時のことである。そこには Eman 先生という日本語担当の熱心な先生が居られるので学生達の案内でその高等学校を訪問した。そこには約1,100名の高校生が学んでおり、そのうち400名が第二外国語として、日本語の学習にいそしんでいる。Eman 先生は、その昔日本がジャワ島を占領していた時代に、日本語を学習し、その後国際交流基金の招きにより、数年前に一度だけ一か月間日本を訪問されただけである。しかしその高校の生徒達が何と眼を輝やかせて、Eman 先生の手作りの教材で、日本語を学習しているのには驚いた。この高校は毎年日本語朗読コンテストを行なうと優勝し、また Bandung のパジャジャラン大学、Bandung 教育大学の学生で、日本語で優秀な成績を修めている人は、殆んど全員この先生の教え子である。一人の熱心な教師の存在が、このように大きな影響を与えるものであるかという事実直面して、今更のように教育の鍵を握るのは、校舎でも、設備でもなく、何より教師の熱意と能力であることに感銘を受けた。日本高校では受験でがんじがらめになっていて、このような生きた授業が行なわれ難くなっている状況を思い合わせて考えさせられた。Eman 先生は日本語を教えることが生涯の喜びであり、日本を心から愛しておられるようで

あった。私自身のインドネシア語が遅々として進歩しない怠慢さをも反省させられた。言語の習得なくしては国際交流も困難であるので私も在イ中に何とかインドネシア語をマスターしようと老骨に鞭打っているのが現状である。

限られた紙数であるので、私のあゆみを記すと、どうしても断片的にならざるを得ないことをお許しいただき度い。次に少し過去にさかのぼって1975年から1976年まで1年有余。フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学で過した時のことについて触れてみたい。着任後間もなく私は思いがけなく自動車事故に逢った。それまで10年以上無事故・無違反の運転歴をもって私は、フィリピンでは偶々運転手を雇っていて、自分で運転していなかったが、「私だけは事故などに逢うことはない。」といううぬぼれと油断があったことは確かである。暴走して来た18歳の少年の運転する車が、私の乗っていた車に横にぶっつかった。車は廃車となり、怪我は私だけですんだ。しかしあと1ミリずれていたら私の生命はなくなっていたかもしれないという、全く九死に一生を得たというのはこの事である。私は頭部を打ち数時間意識を失い、その上右脚の骨折ということで約4週間入院した。その後車椅子、松葉杖に頼って暫く生活していたが、やがてリハビリテーションも順調に進み、普通の生活に戻ることが出来た。この時私と一緒に渡比していた高校生の娘が、事故の処理について保険会社、大使館、大学関係の交渉を一切引受けてやってくれたことは大きな助けであった。私はこの時お世話になった医師、看護婦の方々、アテネオ・デ・マニラ大学のクルス学長、フィッツパトリック副学長、はじめ諸先生や友人、保険会社の熊切副社長、原部長、私の為に証人として立って下さった大学のガードマンなど多くの方々から生涯忘れることの出来ない親切な援助と励ましを受けた。苦しい経験であったが、それだけにフィリピンの病院の内部構造をはじめフィリピンについて学ぶところも多く、フィリピンの人々の心にふれた思いであった。

殊にこの事件について、毎週のように、ケソン市役所の簡易裁判所に出

頭を命ぜられて、事件を示談で解決するようという示唆が Fiscal からなされた。ところが当初は、相手側と私側とは全然話を始める気配もなく、冷たい対立状態が続いた。私は未だ怪我也充分回復しておらず、裁判所通いは全く苦痛そのものであった。5回目の呼び出しの折、Fiscal から私に何かいい度いことはないかと尋ねられた。私は自分の心のうちをそのまま述べた。『私は外国に来て思いがけず交通事故にあいました。しかし私が病院に運ばれた時、私の娘の話では、いち早く相手方の2人の婦人がかけつけて来て下さって、「本当に気の毒なことをした。もし費用がかかれば分担します」といって下さった。私は外国人としてその親切な言葉をきいて大変うれしく思いました』という趣旨のことを述べた。そのあと終始沈黙を守り、相手は激しい性格で、とても話など出来ないと常に対話を拒んでいた、保険会社から派遣されていた私の弁護士は、私に向って「あなたは余計なことを喋った」といって気嫌を悪くした。ところがその公判が終るや、それまで激しい性格でとても話など出来ないと思われていた相手側の弁護士が、私に手をさし伸べて、日本語で「ありがとう。あの2人の婦人のうちの1人は私の妻でした。」とにっこりほほえんだ。それを機縁に両者の間にわたかまっていた氷が解けて、次第に両者の話し合いが進んだ。その後、沢木大使の御助言により Laurel 法律事務所から Reyes 弁護士が応援に来て下さって、8か月振りに事件は示談により解決した。

この生命を賭けた不慮の事件により、再び生かされた恵をどのように感謝してよいか私には分らない。常に雲の柱・火の柱をたてて私を導いて下さる神に従って生きることが、私の為すべきことであると信じている。現在インドネシアに送られたのも、全く御意に従って歩むばかりである。フィリピンから5月末帰国するとまもなく思いがけない事件が起った。それは私の弟が、私の事故を気遣いながら、癌により病死した。彼の死は私に深い悲しみと複雑な感慨を残した。私が生かされる為に払われる犠牲の大きさに直面して驚き、キリストの十字架上の死の意義がほのかに分って来たようであった。

4 私の学問の遍歴

「挫折と再起のあゆみ」は私のささやかな信仰生活をあらわしたものであるが、同時に私の学問の遍歴にもそのままあてはまるのである。

私の学問的関心の推移を概観し、分析してみると、その中心に「変動社会」を据え、一つの分野は「青少年」他の分野は「女性」と相互に内面的、時系列的関連を保ちながら、二つに大別することができる。「教育社会学」を私の専攻分野として選んでいるので、「教育」はこの三者を結ぶ鍵として機能している。いま私が親しく教えを受けた数名の著名な学者の学問的関心の推移を辿ってみると、そこには全く偶然的な要因が作用していることがわかる。例えばハーバード大学教授故 Clyde Kluckhohn 博士が何故ナバホ・インディアンの研究に生涯を賭けられたかという、それは彼が18歳で、プリンストン大学の一年の時に肺結核にかかり、New Mexico の砂漠で療養中、偶々近くにナバホ・インディアンの部落があり、それがきっかけで、インディアンの酋長とは親子の契りを結ぶほど親しい関係になり、遂にナバホ・インディアンの研究を大成された。またコロンビア大学教授 Donald Super 博士は、丁度英国オックスフォード大学での留学を終えて、アメリカに帰られた時は大恐慌時代で街には若い人々の失業者が溢れていた。彼はYMCAに就職し、青年達の就職の斡旋をされていた。そのことがきっかけとなり、職業経歴、職業的発達理論を打ちたてた。また Yankee City Series など多くの人類学的研究を発表された Lloyd Warner 教授が、「社会階層論」に関心をもたれたのは、彼の育ったカリフォルニア州の大牧場で働いていた、メキシコ人が差別的待遇を受けていることに疑問をもたれたことに端を発していると聞いている。シカゴ大学教授の Allison Davis 博士は、彼自身が黒人で、1930年代に選ばれて Rhode Scholar としてオックスフォード大学に留学された経験をもつ秀れた学者であるが、よく講義中に黒人差別についての実際の話をかき下さった。このように学問的関心はその根を深く一人々々のユニークな経

験の中におろしていることが分る。私自身自分の受けた教育の中にも、その萌芽を見出すことができる。それは昭和の一けた時代に、当時軍国化の流れに逆って極めてリベラルな教育を実践されていた、東京府立第一高等女学校校長故市川源三先生に負うところが多い。そこで私は12歳から17歳までの可塑性の高い青年期を過したわけであるので、意識的、無意識的にその人間形成上の影響は大きい。キリスト者であった市川校長は、生徒に宗教的関心をもたせるようにつとめられた。公立学校であったが年中行事として、一年は武士道、二年は神道、三年は儒教、四年は基督教、五年は仏教とそれぞれ一日を費して講演をきき、全員で神社、仏閣、教会に赴いた。四年生の時の講演者は河井道子先生で「神は愛なり」という話をされたのを今でも覚えている。「愛は人を生かし、憎しみは人を殺す」という趣旨の話であった。講演が終り四年生全員富士見町教会にいき礼拝を守った。これが熱心な仏教信者を父にもった私として基督教に触れた最初の経験であり、終生忘れることができない。市川校長は女権擁護者であり、「女子が先ず人間として生きるためには、結婚しても必ずしも夫に従わなくともよい。」と教えられた。これは現在ではさほど革新的な意見ではないが、昭和一けたの時代には、かなり思い切った発言であった。この為、名校長は辞任せざるを得なくなられたのであった。女子に高等教育を受けるよう激励され、当時は0.4%しか高等教育を受ける女子がいなかった時代に、第一高女からは、50%が上級学校へ進学した。

それから10数年たち敗戦を迎え、婦人参政権が与えられ、女性の地位に革命的变化がもたらされた。前述したように、シカゴ大学に留学した時の修論のテーマとして、女性の地位の推移を取り上げたのも社会的インパクトもさることながら、潜在的には市川校長の影響があったことを否むことはできない。いよいよ私が本格的に女性問題を取り上げようと決意したのは、ある事件を通してであった。それは今から20数年前のことであったが、京葉工業地帯が今や形成されようとして、千葉県ではまさに産業革命が起っていた時のことであった。私は東京大学の清水義弘教授の指導で共同研究

を行っていた。そこまで田園的な雰囲気のある農漁村として、東京への農水産物供給の役割を果たしていた千葉県では、工業化におくれをとっていたので必至になって、漁業従事者からの土地の収用、房総半島沿岸の土地の造成を行なうことにより、川崎製鉄所をはじめ、重工業の企業誘致を行っていた。この為に千葉県庁の役人達は、眼から血を出すような辛い思いをして、漁民から土地を収用している話をされたのであった。当時は余り公害問題も表面化していなかったため、千葉県庁の立案者たちは、バラ色の未来図を描いていた。偶々九州で開催された教育社会学会で、千葉県の工業化20年計画の発表が行なわれ、社会構造、産業構造、教育構造の変貌について説明があった。私はその案を見て驚いた。それは千葉県全体の人口が倍増し、それに進学率の上昇を見込み、高校の増設が当然計画されていた。しかし高校増設は殆んどが工業高校であり、普通高校の増設数はその10分の1位の数であった。そこで私は手を挙げて真面目な質問をした。「男女の数は大体同数なのに、女子の高校はどうされるのですか?」と。発表者であった千葉県庁の役人は狼狽して、「ああそうでしたね。女子のことは考えていませんでした。」と答え、満場爆笑した。そのことが暫く語り草になった程で、私もちょっとした質問が余り大きな波紋を起して、少々当惑したが、私にとっては、女子の問題に取り組むよい契機となった。

わが国では女性の雇用状況を見ても、技術革新にともなう政策上のプランを見ても、常に女性は障害者、高年齢層グループと同様に特別扱いが、全然プランの中に入れられてないのが現状である。女性の雇用は常に日本の経済発展の為に手段として考慮されるのみであり、その賃金の男女格差の開きの大きさは、他国にその例をみないのが現状である。この為に私の関心は、益々遠心的に外側に拡がり、経済構造、産業構造に着目せざるを得なくなったのである。繊維産業、食品工業、電子産業など、多数の女子生産工程従事者を雇用している企業では、いかに女性を雇用し、使いすてにしても、生産を上げるかということにのみ汲々としている。それ故その為に大して役に立たない4年制大学卒業の女子に対しては、極めて冷淡な

のである。

このように工業化と女性の地位の関連を調査してみると、日本のみならず、多くの国々でも同様の傾向が見られ、必らず繊維工業が工業化の主要な推進力となっている。しかも日本のばあいは、幼い少女達、貧しい農村から狩り集められた工女たちが、日本の産業の礎となっていたことは、日本としては全く恥ずべきことである。多くの人々が安易に考えているように、工業化が進み、雇用機会が増大しても、決して女性の地位は向上するものではない。否むしろ技術革新が進むと機械が導入され、男子には有利な仕事が生ずるが、女子は益々不利な状況に陥っている。要するに経済発展優先主義、利潤追求第一主義は、人間を尊重しその能力を伸ばすということには配慮せず、いかに弱点を利用して、金儲けを推進するかということに汲々としている。“Development”（発展・開発）が進めば進むほど、先進諸国と後進諸国との格差が増大していくことは、世界銀行の年次報告によっても明らかである。特に、フィリピン、インドネシアのような、建設途上の国では、開発が住民の福祉につながっていない状況を目のあたりみて胸が痛む。この経済至上主義は、軍備の増強とわかち難く結びついて居り、戦争へと駆り立てる原動力となるのである。ここにも絶対的平和を推進する上での大きな障害が立ちはだかっている。

国際婦人年十年のスローガンとして、「平等・発展・平和」ということが、度々繰返されているが、これは先ず女性に対する差別が、人間の尊厳に反し、家族や社会の真の繁栄、福祉に反することであり、国の政治的、社会的、経済的、文化的生活に、同じ尊厳をもった人間として、男性と同等に参加することを妨げ、かつ女性の能力を国や人類の為に発展させていくことの障害となっていると指摘している。そして、女性が常に最底辺部に抑圧されていて、被抑圧人民の解放のためには、女性の力を結集していかなければ成就できないという考え方が根底にあるのである。昨年批准された「婦人差別撤廃条約」は、世界的分業体制、大国による支配体制を否定する第三世界の「新国際経済秩序」樹立の運動と軌を一にしているもので

ある。

「平等・発展・平和」は三位一体として深い関連をもっていて、平和なくして発展はなく、平和は発展の前提条件である。と同時に、人間の全面的発展（経済発展のみではない）なくして平和は持続しないし、あらゆるレベルでの差別、不平等が撤廃されない限り、発展は望めないのである。そしてこの発展を可能ならしめるものは「教育」である。今こそ人間の可能性を最大限にひき出し、核の廃絶を目指して21世紀に向って生き抜いていく力を結集しなければならない。

このようなかかわりで、私は教育に学問的関心をもつのであるが、紙数の関係で「教育」「青少年」については割愛させていただくことにする。

5 おわりに

私の退職に際し、わざわざ三宅教育研究所長から、所感を認めて提出するようにとのご要請があった。私はもっとICUのことについて書き度いと思ったが、ICUにおけるもろもろの活動や思い出は、未だ私の中で醗酵を続けていて、充分沈黙していない状況なので敢えてこのように拙稿をまとめさせていただいた。四半世紀の間いろいろとご指導いただいた多くの先生方や、お世話になった職員の方々、そしていつも時の移るのも忘れて学び合った学生諸兄弟に心から感謝を述べさせていただく。私はこれから残された僅かな人生を、真に人類の福祉につながっていく仕事に打ちこんでいき度いと心から願っている。それには私自身深刻な危機感に襲われている「世界平和の維持」に賭けていかなければならないと考えている。私自身の行動を一つ一つ反省しながら、人類が、次の世代が、生き残れる道を実確なものにしていく努力を、時を移さず積み重ねていかなければならないと深く感じている。原子爆弾投下の償いとして設立されたICUに力強い平和運動が、平和教育が推進されることを期待して筆をおく。